

匂宮卷における薫像

吉 岡 曠

八宮とその一家の経歴を紹介した橋姫卷冒頭の文章は、かつて政権争いの具に利用され、その争いに敗れて零落した、一人の「世にかずまへられ給はぬ古宮」の境涯を過不足なく語った名文である。この古宮に、北の方の死がどれほどの悲しみをもたらしたか、邸宅の焼亡がいかなる打撃を与えたか、その間に宮の生活はいかに願生浄土の一点にしばられていったか、それを妨げる姫宮達への愛情がどれほどこまやかなものだったか、そういう事柄がよく納得できるように、行き届いて叙述されている。従つて、八宮の仏道修業に熱心なことを伝え聞いた宰相中将が「俗ながら聖になり給へる心の捷やいかに」と強い関心を寄せた旨を聞いて、八宮が次のような感想をもらすものいかにももつともだと思わないわけにはいかない。

世の中をかりそめのこと思ひとり、いとはしき心のつきそむる事も、わが身に憂ある時、なべての世もうらめしう思ひ知る初ありてなむ、道心も起るわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ、何事も飽かぬことはあらじと覚ゆる身の程に、然はた後の世をさへ、たどり知り給ふらむがあり難さ。ここには然べきにや、ただ厭ひ離れよと、ことさらに仏などの勤めおもむけ給ふやうなる有様にて、おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど、(略)かへりては心はづかしげなる法の友にこそはものし給ふなれ(古典全書、源氏物語、五、二二九)。

八宮はわが身とひきくらべて、今を時めく貴公子薫と道心との取り合わせが理解できないのだが、理解できない

ままた、薫の宗教的資質の優秀性ということで不審をはらしているわけである。しかし「かへりては心は、づかしき法の友にこそは云々」と言う代りに、そんな若造の謂れのない道心なぞ信用するに足りない、と言うこともできた筈で、いずれにしても右の八宮の詞は、八宮の筋道の通った、動機の明瞭な道心と対比されて、薫の道心の特異性がおのずから明らかになるような仕組になっていると言うことができる。そして薫を描いて宇治十帖という物語はなく、道心を描いて薫という人物を考えることができないとすれば、われわれは作中人物の八宮と同列に、若いのに奇特なこととすましておくわけにはいかない筈だろう。作者はここで薫と道心の特異な結びつきについて、読者が改めて八宮と同じ常識的な疑問を抱いてみることをすすめていると言ってよいのである。改めて言うのは、われわれは薫が不義の子であり、不義の子であることが道心の動機になっているという八宮の知らない事実を、匂宮巻で知らされているからだ、その匂宮巻の説明は、橋姫巻冒頭の文章が八宮の道心をわれわれに納得させるように、薫の道心を納得させてくれるだろうか。

幼心地にはの聞き給ひし事の、折々いぶかしう、おぼつかなく思ひ渡れど、問ふべき人もなし。宮（女三宮）には、ことの気色にても、知りけり、とおぼされむ、かたはらいなき筋なれば、世ともの心にかけて、「いかなりける事にかは。何の契にて、かう安からぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ。善巧太子のわが身に問ひけむ悟をも得てしがな」とぞ、ひとりごたれ給ひける。

おぼつかない誰に問はましかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

答ふべき人もなし。事に触れて、わが身につつがある心地するも、ただならずものなげかしくのみ、思ひめぐらしつつ、宮もかく盛の御容貌をやつし給ひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむき給ひけむ、かく思はずなりける事のみだれに、必ず憂しとおぼしなる節ありけむ、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべき事のきこえにより、われには気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。明暮勤め給ふやうなめれど、はかもなくおほどき給へる女の御さとの程に、

蓮の露も明かに、玉と磨き給はむ事も難し、五つのなにがしも、なほうしろめたきを、われ、この御みちをたすけて同じうは後の世をだにと思ふ。かの過ぎ給ひにけむも、安からぬ思に結ばれてや、などおしはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、元服はもの憂がり給ひけれど、すまひはてず、おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまでではなく、やかなる御身の飾も、心につかずのみ、思ひしづまり給へり（五、一三九）。

この一節は「われには気色を知らする人のなきなめり、と思ふ」を境として前後に分けることができる。前半は出生の祕密にうすうす気づいた薫が、折に触れて身辺に「つつがある心地」を覚えつつ、周囲に穿索の目を向けることを述べたものであり、後半はそうした薫に幼時から道心が宿った旨を述べている。しかしここで注意しなければならないのは、出生の祕密とそれに基くもやもやした気分、これを薫の厭世感と呼んでもいいかもしれないが、その厭世感と道心とはそれぞれ別のものであって、必ずしも直ちにイコールで結びつかないことである。厭世感の赴くべき対象は、女、権力、犯罪、その他無数にある筈であり、薫の厭世感が道心と結びついたについては、そこに薫なりの特殊事情が考えられなければならない。そしてそれこそ薫の道心の動機でなければならない。それは何か。右の一節によれば、「われこの御みちをたすけて、同じうは後の世をだに」、「かの過ぎ給ひにけむも、安からぬ思ひに結ばれてや、などおしはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて」などがそれに当る、と言うほかはないだろう。しかし薫の道心が以後の物語に及ぼす影響の大きさにくらべて、これはまた何という取るに足りない感傷的な理由であらうか。しかもこの物語中で多少とも薫の道心の由来に触れた記事は、これが唯一のものである。ここから薫の道心は、生れつきの資質としてはじめからこの人物に与えられていたという説が生ずる。しかし道心天賦説は、作者が実際にそういう風に述べているわけではなく、読者のいわば解釈に過ぎない。読者の解釈必ずしもわるいわけではないが、この場合作者は現に右の一節のように語っているのだから、われわれは作

者が語っている通りに、すなわち薫の道心は、そもそも母親への同情とか、死んだ柏木にあの世で会いたいとかいうほどの、年令相応に子供っぽい、感傷的な思いつきに過ぎなかったと受けとったらどうであろうか。作者はここで薫の道心の由来について下手に語ったわけではなく、いわばその本質について、ありのままに、言うことは薫の主観に即して、語っているのである。

この感傷的な、或いは主観的な道心の行方をもう少し追ってみよう。橋姫巻で薫と姫宮達の間交渉が生ずると同時に、辨の尼君という人物が登場する。この古女房は薫に出生の秘密を語るといふ役割を持っていて、橋姫巻の後半はその二人の間のやりとりが重要な主題になっているが、先の一節を少し注意して読むと、薫は母宮の出家の事情も推測しているし、「かの過ぎ給ひにけむも云々」と、柏木の存在も知っており、出生の秘密のほぼ全貌を既に承知していたものとみなしてさしつかえない。従ってそのことを確認させるためにだけに古女房が登場するわけもないので、薫にとって辨の尼君出現という事件は、「人もまさに漏り出で知らじやは」と考えた（或いは危惧した）ことが現実となつて、自分の若しかすると致命的であるかもしれない秘密を知っている人間が目の前に現れたということなのである。

さて、かくその世の心知りたる人も残り給へりけるを、めづらかにもはづかしうも、覚ゆることの筋に、なほかくいひ伝ふる類やまたもあらむ。年頃かけても聞き及ばざりける（五、二四二）

というのが、辨の話を聞き終った薫が最初に発した言葉だった。そして、

小侍従と辨と放ちて、また知る人侍らじ。一言にても、また他人にうちまねび侍らず（二四三）

という返事を得ながら、

かやうの古人は、問はず語にや、あやしきことの例に言ひ出づらむ、と、苦しく思せど、かへすがへすも散さぬ由を誓ひつる、さもや、とまた思ひみだれ給ふ（二四五）

と、懸念は容易に去らない。又、

かかる対面なくは、罪重き身にて、過ぎぬべかりけること（二四五）

というのが、この場の会話を切上げる際の蕉の言葉だが、実父の死を辨の話ではじめて知ったというのは事実に合わせて、従つてこの殊勝な言葉も通り一ぺんのあいさつとしか受けとれない。すぐ後辨から証拠の文殻を渡され

と、
つれなくて、これは隠い給ひつ（同右）

とある、この「つれなくて」などが、よほど辛辣に蕉の心情を語るのである。家に帰つた蕉は、早速包みを開いて中身をあらため、

げに落ち散りたましよ、と、うしろめたう、いとほしき事どもなり（二四七）

と改めて冷汗を流して、ともかく一件は落着するが、辨がしゃべりはしなかつたかという懸念は椎本巻に入つてもまだ蕉の口から洩れ、しかもその懸念が、蕉が大君達へ関心を抱いた動機的一端であつたかもしれないとささ語られる。

中納言の君は、ふる人の問はず語り、皆例の事なれば、おしなべて淡々しうなどは言ひひろげずとも、いとほしかしげなめる御心どもには、聞き置き給へらむかし、とおしはからるるが、ねたくもいとほしくも覚ゆるにぞ、またもて離れてはやまじと思ひ寄らるるつまにもなりぬべき（二七三）。

先には道心の動機であつたものが、今度は結婚の動機にすらなりかねない。そして動機はともかくとして、辨の

話を聞いて以来薫の関心が、その道心を深めるのとは全く逆の方向に、すなわち源氏の子ではなく柏木の子であるという秘密をあくまでもかくし通すことによって、自己の世俗的安泰をはかることに集中したとしか見えないのは、辨の尼君出現という一種の危機に出あって、感傷的道心がもろくもその本質を露呈したのだと言つてよいであろう。

薫が道心という錦の御旗を持つている限り、光源氏とは別様の理想的主人公として設定されていることを疑うわけにはいかないが、薫の道心の本質が仮に右のようなものであるとすれば、われわれはこの人物についても一度根底から考え直してみる必要がある。そして薫がいかなる人物であるかということは結局この物語の全体を通して明らかにすることだが、作者は匂宮巻であらかじめこの特異な人物の大体の輪郭を読者にのみこませようと試みており、先に引用した一節もその一環に過ぎないから、先ずこの巻の敘述を注意深くたどつてみることから始めるのがよいであろう。

二

薫は十四才で元服するが、冷泉院とその后秋好中宮が源氏の委嘱もあつて特別に目をかけており、元服の儀式も冷泉院で行われた。元服と同時に侍従に補せられ、同年の秋には右近の中將となり、「いづこの心もとなきにか」恩賜の加階まで加えられる。院の御座所近くに曹司が設けられ、童、下仕えの人選まで院が見入れ、院内のめぼしい女房はすべてそちらに移し渡して、「院の内を心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ」こまやかな配慮がなされた。そのもてなしぶりは弘徽殿腹の女宮をかしづく有様に劣らず、これも中宮に対する御寵愛が年と共に

まさるせいだろうが、何もそれほどになさなくても、と人が見るほどであった。母の尼宮はかえって親のように薫を頼り、帝からの御召も繁く、東宮や次々の宮達も親しい遊び相手として伴い給うので、薫は身体がいくつあっても足りないほどであった（一三八～一三九）。以上が匂宮巻における薫像設定のいわば第一段階である。薫に対する周囲のもてなし、特に冷泉院の寵遇ぶりがこまごまと語られるが、それがやや常軌を逸したものであることを、「後の宮の御おぼえの、年月にまさり給ふけはひにこそは、なかさしも、と見るまでなむ」と、さりげなく指摘している点に注意すべきである。

続いて先に引用した一節が来るが、末尾の「元服はもの憂がり給ひけれど、すまひはず、おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまではなやかなる御身の飾も、心につかずのみ、思ひしづまり給へり」は、道心の表明であると同時に、より直接には世間のもてなしに対する薫の態度を語ったものであり、前段との関聯から言えば、むしろ後者の方に意味の比重がかかってくる点に注意したい。つまり、薫は世間からはなやかにもてなされていた、しかし世間のもてなしに対する薫の態度はすこぶる冷淡だった、というのが第一段から第二段へかけての論旨の運びの大筋なのである。

そして道心の由来にせよ、薫の超俗的な姿勢の由来にせよ、由来という観点から言えば、この一節に関する限り、出生の祕密↓道心↓世俗に対する無関心という図式を一応そのままに受けとっておくほかはないだろう。しかしこの後、薫が内裏からも夕霧からも厚遇される旨を述べた短い節をはさんで、第三段として次のような一節が来る。仮に小段に区切って引用する。

(1) 昔光る君と聞えしは、さるまたなき御おぼえながら、そねみ給ふ人うち添ひ、母方の御後見なくなどありしに、(2) 御心

ざまもの深く、世の中を思しなだめし程に、ならびなき御光を、まばゆからずもてしづめ給ひ、つひにさるいみじき世のみだれも出来ぬべかりし事をも、ことなくすぐし給ひて、(3)後の世の御つとめも、おくらかし給はず、(4)よろづ然りげなくて久しくのどけき御心掟にこそありしか、(5)この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて、思ひあがりたること、こよなくなどものし給ふ（一四一）。

(1)は幼年の光源氏の置かれた環境が、帝からは無二の寵愛を受けていたが、政敵として弘徽殿太后一派が時めいていたのに対し、母更衣の身分が低くて母方の後ろ立てが期待できなかったなどのことがあり、必ずしも順境とは言えなかった旨を述べたものである。(2)は、その必ずしも順境ではない環境とそれから尾を引いた中年の危機を、源氏が思慮深くおだやかな性格の力によって無事に乗り切ったことを述べており、光源氏の栄華は人生の試煉に耐えた、その人間的力量によって立派に裏打ちされていたというのであらう。(3)は、そのようにして現世の勝利者となった源氏は後生に対するつとめも忘れなかったというので、「おくらかし給はず」は、言いかえれば早過ぎも過ぎ過ぎもしない丁度適当な時期に、仏道に心を寄せたということである。(4)は総評で、右の例からもうかがえるように、光源氏の生き方はまことによく調和のとれた良識的なものであって、調和的であるが故に特に人目をひくような言動なり事績なりがなく、気ながに、結論を急がない態度で人生に処したと、その円満具足の一生を要約している。(5)は右のように描かれた源氏像と薫を比較したものであり、「まだしきに世のおぼえいと過ぎて」が、先の第一段を背景としながら小段(1)(2)に対応し、「思ひあがりたること、こよなくなどものし給ふ」が、第二段の薫の姿勢をふまえつつ小段(3)(4)に対応するものであることは言うまでもない。

さて「思ひあがる」という中古語は必ずしも悪い意味には使用されないが、全体の趣旨から言って、この一節が光源氏との比較の形を借りた薫批判であることは明らかだろう。つまり、薫に対する世間の待遇（第一段）、世間の

待遇に対する薫の反応（第二役）、それに対する批判（第三段）というのが、薫像設定の一貫した骨組なのである。そして従来薫の理想性の最も重要な要素と考えられてきた道心とか世俗に対する恬淡な態度が、辨の登場を待つまでもなく、ここで批判の焦点になっていることは注目に値する。「おくらかし給はず」が薫の早過ぎる道心を諷したものであり、「よろづ然りげなくて久しくのどけき御心掟」が、薫の極めて特徴的な対人世態度と、人生に対する態度決定があまりにも性急になされたことに対する暗黙の批判であることは言うまでもない。

しかもこの批判は単に早過ぎるとか目立ち過ぎるとかといった外面的な批判にはとどまらないだろう。源氏の調和的なさりげない生き方、「久しくのどけき御心掟」は、源氏が実際にそれによって逆境や危機を乗り越えた実績によつて支えられており、実績を通して確固不動の処世態度になったものである。「まだしきに世のおぼえいと過ぎて」逆境の味を知らない薫には、その実績がない。未だ人生の試煉を経ない「思ひあがりたること、こよな」き姿勢が果して不動の姿勢たり得るだろうか、この一節の薫批判はその道心や超俗的姿勢の本質についての疑念にまで至らざるを得ないのである。

「まだしきに世のおぼえいと過ぎて云々」という一行はおそらく右のような意味合いをこめて語られているのだが、同時にこの一行が、いともあっさりと、薫の「思ひあがりたること、こよな」き態度は「まだしきに世のおぼえいと過ぎて」た結果である、と指摘していることも見落すわけにはいかない。第一段で冷泉院の常識はずれの寵愛ぶりがこまごまと語られたのも、逆境の味を知らないという批判を用意するただけではなく、世間の待遇とそれに対する薫の態度の間には、因と果の関係があることを言うための伏線にほかならなかったのである。

念の為に言えば、「思ひあがる」は「志を高く持つ」「自負する」というほどの意味で、右の一行を直訳する

と、世間の評判が高くて益々この世に高い志を持つようになった、ととれなくもないが、この「思ひあがる」は、先の「心につかずのみ、思ひしづまり給へり」と二重写しになって、ここでは世俗に対して無関心な高踏的な態度を持すというほどの意味で使用されていると解してさしつかえない。つまりこの一行は、薫の超俗的な態度は、環境から甘やかされたために、環境の無造作に与えてくれるものが有難味を失った状態に過ぎないと言っているのである。この解釈は、とりもなおさず薫の態度に対する最も厳しい評価であると言つてよいであろう。

三

前章で述べたことを要約すると、第一に、薫像の設定は専ら「まばゆきまではなやかなる御身の飾も、心につかずのみ、思ひしづまり給へり」、或いは「思ひあがりたること、こよなくなどぞものし給ふ」という、この人物の世俗への対し方に見られる一特徴を中心として展開することである。第二に、薫の右のような姿勢に対する解釈として、作者は出生の祕密↓道心↓超俗的態度という、いわば表向きの解釈を先ず提出しながら、薫像設定の仕組全体を通して、環境の甘やかし↓環境に対する甘え↓超俗的態度という別様の解釈を再提出して、先の表向きの解釈を暗に否定し去っていることである。

さて第一の点だが、薫の世俗に対する高踏的な態度が、道心を胸に抱いて「思ひしづま」っている状態であるにせよ、単に環境から甘やかされたために、環境がふんだんに提供するものに対して不感症になった状態に過ぎないにせよ、作者はこの人物のこういう状態を特に指摘することによって、この人物について結局何を言わんとしているのであろうか。これまでのところでは薫の不感症は主として世間の提供する名声、地位、財物等について言われ

ているわけだが、この巻の終りの方で、蕉は女性に対しても世間並の男性が抱くような関心を抱かなかった旨が述べられており、蕉の意欲減退症は、蕉を取りまく周囲の現実一般に及んでみるとみなしてさしつかえない。つまり蕉は、その由来が環境にあるにせよ、出生の秘密にあるにせよ、要するに周囲の現実に対して正常な興味を抱くことのできない人間、いわば一種の現実喪失者としてこの物語に登場すると言つてよいのである。

次に第二の点だが、作者は何故そのことを率直に言わないで、わざわざ表裏二様の解釈という複雑な語り方をしなければならなかったのか。ちなみにこの二重の語り口はこの物語の至るところに見出せるもので、宇治十帖における作者の主要な方法であるとも言つてもよい。例えば蕉の道心に関する八宮の詞が、表面の意味は八宮の蕉賛美でありながら、読み方次第では、むしろ蕉の道心に対する重大な疑惑を印象づけるような仕組と効果を持っていることは先に述べた通りであり、更に八宮の詞が「年若く世の中思ふにかなひ、何事も飽かぬことはあらじと覚ゆる身の程に、然はた後の世をさへ、たどり知り給ふらむがあり難さ」と言う時、陰の声は、蕉の場合「何事も飽かぬことはあらじと覚ゆる身の程」こそ、とりもなおさずその道心の母胎であると語っていると、前章で述べたことを前提とすれば、受けとらざるを得ないだろう。

さて八宮の詞の場合は、陰の声が作者の声であり、表の方が八宮のそれであることは言うまでもないが、前者の場合、表向きの解釈は誰の、何に基いた解釈であろうか。私は先にも一寸触れたように、これを蕉の主観に即した解釈、言いかえれば蕉自身の自己診断とみなしてもさしつかえないと思う。何故なら、蕉の道心とか超俗的態度とかは一種の擬態に相違ないにしても、蕉自身それが擬態であることに気づいていた形跡は、以後の物語を通して見あたらなからである。道心という幻影は、その背後の現実との乖離という現実に支えられて、一生この人物をた

ぶらかしていたとみなしてさしつかえない。八宮だけではなく世間一般が薫の擬態を素直に受け入れたのも、薫自身が真先に自己の擬態によってあざむかれていたからであり、一生擬態を演じ続けながら、薫を悪人と考えることができないのもそのためである。そこで、この物語には、薫自身がかくありと考えてそのように振舞い、世間もそれを公認する薫と、作者その人がかくありと考える薫と、二人の全く趣を異にする薫がいて、表の語り口は前者の代弁であり、裏の語り口は後者のそれであると考えることができるだろう。そして少し先走って言えば、この物語の主題はこの二人の薫の間隙を通して微妙に紡ぎ出されていくと言つてよいので、二重の語り口という微妙な方法は、そういう物語の構造自体の要請にほかならないのである。

ところで、先に薫は現実喪失者としてこの物語に登場すると言つたが、この二人の薫の存在は、薫が真正の現実喪失者であることも証明していると言つてよいだろう。現実一般を見失つた人間が自己という現実だけを保有しているわけもないので、薫がかくありと思う自己とは、要するに自己についての薫の観念であり、薫は一生この観念にとりつかれて、自己の正体を見失つていた。薫にとっては観念の自己が實在の自己であり、現実の自己は影に等しいものだったからである。同様の倒錯現象が外側の現実についても絶えずおこなわれるわけで、現実の大君ではなくて、大君という観念が薫にとっての實在の大君である、という種類の事態が今後次々と起り、宇治十帖の悲劇を生み出していくだろう。

ところで、この物語のもう一人の主人公匂宮は、やはり光源氏との比較を通して、次のような人物として設定されている。

（前略）わざとめきて、香にめづる思をなむ、立てて好ましうおはしける。かかる程に、すこしなよびやはらぎて、好いた

る方にひかれ給へり、と世の人は思ひ聞えたり、昔の源氏は、すべて、かく立てて、その事と、やうかはり、しみ給へる方ぞなかりしかし（一四三）。

ここで比較の対象になる源氏も、「よろづ然りげなくて云々」という薫の場合とほぼ同じ見方でとらえられた人間像であり、要するに諸能力、諸性質が一人格内で美しい調和を形成し、内界と外界も正常な均衡を保っている、いわば古典主義的な理想像である。それに対して匂も薫も、それぞれの仕方での内的均衡を見失い、同時に外界との正常な関係も失って、それが彼等の特徴ある言動、態度、性格として現れている人間達で、いわばロマン主義的な人間像であると言ってもよいかもしれない。光源氏を真中に置いて、一方が極端に外向的であるとすれば、一方は極端に内向的であり、一方が行動的であるとすれば一方は傍観的である等々、全く対照的な人物として設定されている。しかし匂宮は薫にくらべると比較的わかりやすい人間であり、この物語における役割もどちらかと言うと副主人公的であると言ってよいであろう。匂宮巻ではこの後、「立てて、その事と、やうかはり、しみ給へる」本性が女の方面でも大いに発揮されそうである旨が述べられるのだが、物語を通して、大体そういう人物として、そういう風に振舞いながら、薫の人物と行動に側面から光を当てていく。

最後に、薫の女性に対する態度についてこの巻の終りで述べられていることを、かいつまんで紹介して置こう。これは薫という人間が現実と交渉する仕方の、いわばモデルケースにはかならない。

匂宮が年令相応に、冷泉院をはじめあちらこちらの姫君達に、しきりに好奇心を動かすのに対して、

中将は、世の中を、深くあちきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れ難き思や残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはむは、つつましく、など思ひ棄て給ふ。さしあたりて、心にしむべき事のなき程、さかしだつにやありけむ。人の許なからむ事などは、まして思ひ寄るべくもあらず（一四四）。

「世の中を、深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば」と、何食わぬ顔で語りながら、すぐに「さしあたりて云々」とまぜつ返しているのは、例の皮肉な語り口の露骨な例である。これは薫の自己規定に基く、対女性のいわば一般的な態度だが、次に「人の許なからむ」あたり、例えば冷泉院の姫宮などに対しては、

同じくは、げにかやうならむ人を見むにこそ、生けるかぎりの心ゆくべきつまなれ、と思ひながら、大方こそ隔つることなくおぼしたれ、姫宮の御方さまのへだては、こよなく気遠くならはさせ給ふも、道理にわづらはしければ、あながちにもまじらひ寄らず、若し心より外の心もつかば、われも人もいとあしかるべき事、と思ひ知りて、もの馴れ寄ることもありけり（一四五）

とある。心をひかれないわけではなかったが院のへだてがわずらわしいので近寄らなかつた、というのは、業平や源氏の恋を引き合いに出すまでもなく、まことに散文的であじけないが、冷泉院の姫宮が冷泉院の姫宮である限り、つまり現実が観念に転化しない限り、薫と現実との関係は、常にこの通り索然としたものでしかないのである。しかし薫にしても、別にわずらわしくなどない普通の女房達に対しては、必ずしも手を拱いてばかりいるわけではない。

わがかく人にめでられむと、なり給へる有様なれば、はかなくながの言葉をちらし給ふあたりも、こよなくもてはなるる心なく、靡きやすなる程に、おのづからなほざりの通ひどころも、あまたになるを、人の為に、ことごとしくなどもてなさず、いとよくまぎらはし、そこはかとなくなさけなからぬ程のなかなか心やましきを、思ひ寄れる人は、いざなはれつつ、三条の宮に参り集るはあまたあり（一四五）。

薫の方から積極的に求めることはないが、何しろ美男子なので女の方でそつとして置かない。しかしその女達のために、はつきりと愛情を形に表して見せるようなことはせず、人目を気にして巧みに隠密行動をとる、それでも薫の

とりなしには何ということなく情愛のないでもないような風情があつて、そのあるかなきかの風情にかえて女達の心はひきずられる。「思ひ寄れる人は、いざなはれつつ」と言い、「つれなきを見るも、苦しげなるわざなめれど、(略)さすがにいとつかしう、見所ある人の御有様なれば、見る人みな心にはからるるやうにて見すぐさる」(一四六)と言うのだが、右の筋書をそのまま脚色したような一場が宿木巻に見える。(六・一六八―一六九)。

按察の君の局で一夜を明かした薫が、「明け過ぎたらむを、人のとがむべきにもあらぬに、いと苦しげにいそぎ起き給ふ」のを見て、按察の君は寂然としない。そこで「うちわたし世にゆるぎなき関川をみなれそめけむ名こそをしけれ」と歌を詠むと、「深からずうへは見ゆれどせき川のかよひはたゆるものかは」と無神経な返歌が返ってくる。「深しとだにのたまはむにてだにたのもしげなきを、この上の浅さは、いとど心やましくおぼゆらむかし」というのが、作者の註である。そして妻戸を押し明けて、「まことは、この空見給へ、いかでかこれを知らず顔にてはあかさむとよ。えんなる人まねにてはあらでいとどあかしがたくなり行く、夜な夜なの寢覚めには、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」と、明け方の空をうち仰いで見せてから、出ていってしまう。こういう思い入れを指して「そこはかとなくなさけなからぬ程の」と言うのである。

薫の観念では「世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心」のままに振舞っているに過ぎないのだが、第三者の目から見ると、現実の薫の情事はありふれた女たらしの手口に甚だよく似ている。そして傷つくのは女達の心だけではなく、薫自身もこういう索莫とした情事から心の充足を得ることはないであろう。薫が「思ひすましたる心」という観念に固執すればするほど、現実には薫にあじきない面を見せつけ、現実のあじきなきに触れれば触れるほど、薫の心は益々「思ひすま」されていくほかはない。こういう悪循環が、現実喪失者と現実との因果な関係

なのである。

以上句宮巻で素描された薫像をかなりの見込をまじえながら紹介した次第だが、作者が薫と匂という極めて対照的な性格設定からこの物語をはじめている、或いはそのためにわざわざ一卷を設けていることはそれなりの意味があるので、薫という人間を右のような人物として理解しておくことは、橋姫巻以降の物語を読む上で必須の前提であると言つてよいと思う。例えば、周囲の女性達に対して常に索莫とした感情しか経験し得ない薫が、大君だけは恋愛の対象とすることができたのは何故か、それにもかかわらず薫と大君が結ばれなかったのは何故か、そういう物語のポイントポイントで、薫の精神機構の特質が常に主導的な役割を果しているのをわれわれは見るだろう。そして結局、「ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへもしらず消えし蜻蛉」（七・一五〇）という述懐の一首にたどりつく。薫の追い求めていたのは蜻蛉だったとこの述懐は語っているのだが、この述懐の薫における必然性を理解することが、宇治十帖という悲劇の必然性を理解することだと言つてよいのである。

（附記）句宮巻には、薫が生れつき身に芳香を帯びていたのに対し、句宮がそれをうらやましく思つて「香にめづる思をなむ立てて好ましくおはしける」という一節がある。これが「匂ふ兵部卿」「薫る中將」という通称の由来なのだが、私は敢えてこの一節に触れなかった。その理由は、第一にこういう特徴を両者に与えた作者の真意が私によくつかめないため、第二にこの特徴はいかにも曰くありげに語られながら、橋姫巻以降の物語では殆ど問題にされず、いわば作者自身がそれを無視していると見られるからである。

右のような次第で薫の芳香が何を意味するのか、私自身に定見はないのだが、ただこれを薫の道心の象徴とする見解には確かに賛成し難い。何故ならこの巻における両者の対照的な造形ぶりから言つて、薫の芳香が先天的道心の象徴なら句宮の「香にめづる思」は後天的道心の象徴でなければ釣合いがとれないからである。事實は句宮の場合「かかる程に、すこしなよびやはらぎて、好いたる方にひかれ給へり」と、その色好みに関係づけられている。